

昭和絶滅危惧職業の人々

秋山真志 著 中央公論新社刊 定価2090円(税込)

不思議でも何でもないが、時の流れとともにこの世から姿を消してしまう職業がある。本書ではその職業8種、飴細工師、俗曲師、錢湯絵師、幫間、見世物師、蠟人形師、チンドン屋、流しを取り上げ、それぞれ今や風前の灯となった職業とそれに従事する人々の現在、過去、未来に肉薄する。

先頭はまず、東京藝大出の飴細工師。80℃に温めた水飴を手のひらで捏ね、割り箸の先に丸い玉をつくる。玉の上下左右自由自在に指で伸ばしてゆく。一瞬の気で手足ができる。ものの2、3分。子どもたちは競って細工師へ。「どうしても画家になりたかったわけではない。ただ当たり前の世の中には居たくない、真つ当な勤め人

になるのが嫌だった」。藝大を4年の中退、この道に入る。

続いて時代から置き去りにされてしまった俗曲師。浮世絵から抜け出たような艶姿の松山うめ吉さん。三味線を弾きながら、小唄、端唄、都都逸を次々に繰り出す。ごく普通の家庭に育ち、中学までピアノ、バレエを習う。自分探しに上京中、東をどりを見てカルチャーショックを受け、国立劇場寄席囃子研修制度に飛び込む。1998年、寄席の前座で俗曲師の舞台に立つ。現在、都内の寄席に7、8人。希少性は高い。

次に錢湯絵師。錢湯は最盛期の1968年、1万7999軒だったものが、現在は1493軒となつて(全浴連)。錢湯がこれだけ減少しているのだから錢湯絵師も減る。取材した中島盛夫さんを入れて3人。まさに危惧種。

これらの希少職種の世界を紐解くにはその周縁について広く深い知識が必要である。それを著者は、補足説明、用語解説、注釈を駆使してわかりやすく仕立てる。それゆえ本書は何割増か充実している。



今月の本棚

地政学的リスクの緊迫化や生成AIの急速な台頭、目まぐるしく変わる市場トレンドなど、現代は予測不能な変化の連続である。

この混沌とした世界を生き抜く確かな道標として、金融・資本市場の第一線で活躍してきた著者は、松尾芭蕉が唱えた「不易流行」の視点で、読者に現代社会の本質を再発見させてくれる。不易とは変わらない本質であり、流行は変わりゆく世の中を意味する。「不易流行」は、普遍的な本質を見極めつつ、新しい変化を柔軟に取り入れるという、極めて実践的な思考法である。

本書は、「学び」「記憶と記録」「SNS」「金融・資本市場」など、現代の日本社会が直面するさまざまなテーマを扱ったエッセイ集である。単なる目先のマーケット動向の解説にとどまらず、その底流にある人口動態やジェンダーといった社会の底流にある構造問題にまで深く切り込んでいる点に、強く引き込まれる。目先の数字を追うだけでは見えてこない、マクロな視点での市場分析や未来予測の

戦後80年と「不易流行」

幸田博人著

ヒントが詰まっている。

SNSの普及により情報が洪水のように溢れる現代において、周囲の意見やバズワードに惑わされずに「守るべき本質」と「変えるべき変化」を見極める軸を持つことは、日々の重要な意思決定における強力な武器となる。

著者は歴史に学ぶ「温故知新」の姿勢を重視し、歴史的・学際的視点から自ら問いを立て続ける「能動的な学び」の大切さを説く。これは、リスクリングの本質とも言える重要な姿勢である。

戦後80年の節目を迎え、日本の再成長への示唆を模索する本書は、激変の時代を生き抜くための確かな思考の軸を授けてくれる羅針盤となるだろう。

「戦後80年」と「不易流行」

幸田博人 選 イノベーション・インテリジェンス研究所刊 定価2420円(税込)

